九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[015_1982]第十五回中央図書館貴重文物展観目録 : 近世小説

九州大学附属図書館中央図書館

中野, 三敏
九州大学文学部 : 教授

https://doi.org/10.15017/1485009

出版情報：大学広報. 461, pp.1-9, 1982-12-10. The Committee of Public Relations Kyushu University
バージョン：
権利関係：

大学広報 No.461
昭和５７年１２月１０日発行
（編集）
九州大学広報委員会

第十五回中央図書館貴重文物展観目録

（中央図書館）

近　世　小　説

は　じ　め　に

展観に際し教職員や学生諸君が多数来館されるよう希望します。

なお、今回の展示資料の選定、解説、指導配列等について文学部中野三敏教授に多大の御尽力を頂きました。ここに厚く御礼申しあげます。

記

展示場所：中央図書館メインロビー

展示期間：昭和５７年１２月１０日（金）から
　　昭和５８年　１月１４日（金）まで

展観資料の解説

近世小説は、中世お伽草子の流れをくむ仮名草子にはじまる。仮名草子は、知識人による啓蒙性の強い作品が多く、近世初期の思潮を色濃く反映している。やがて西鶴の「好色一代男」が刊行されるに至って、浮世の諸相を写す浮世草子が生まれる。好色物・武家物・町人物を次々に出し一時代を築いた西鶴の没後は、僅かに八文字屋本が気を吐いたが、やがて浮世草子は衰微する。代わって中国白話小説の影響を受けた庭鐘、秋成らの読本が生まれ、同じく中国趣味に端を発す漢文戯作の中から洒落本が発生する。これらの新しい文芸は、近世前期文芸の拠点であった上方でまず生まれたが、文化の東漸と共に文芸の中心もやがて江戸に移り、後期文芸の花が開くことになる。洒落本は遊里を舞台にした会話体短編小説という定型を確立し、天明期に全盛期を迎え、寛政改革の頃より衰えるが、その心理描写を推し進めた新しい小説人情本が生まれ、春水が活躍した。一方享保以来の談義本が方法として持つ滑稽が自己目的化して生まれたのが滑稽本であり、一九、三馬がその中心的存在となった。読本では、京伝・馬琴が「水滸伝」流行に乗って長編伝奇小説を次々に発表、とりわけ馬琴は勧懲思想を正面に押し出し、雄大な構想力をもって大作「八犬伝」を完成した。

今回の展示では、このような近世小説の流れが概観できるように、様々のジャンルから比較的よく知られている作品１５点を選んでみた。

1. 可笑記　　文学部蔵

仮名草子。大本（２７.７×１９.０㎝）五巻五冊。如儡子作。寛永十三年成立。本書は寛永十九年版十二行本で、同年版行された十一行本を版下に使用して若干の手を加えたものと思われる。従って十一行本と同じ「寛永壬午季秋吉旦刊行」の刊記を有するものの、実際の刊行はそれよりやや下るものと考えられる。

「可笑記」は全二百八十段より成る啓蒙教訓書的性格をもつ随筆集である。作者如儡子は本姓斎藤氏、もと出羽山形最上家の家臣である。それだけに、本書の風俗批評は修身経国に関わる儒教的色彩の濃いものが多い。また随処に「徒然草」的発想が見られ、その影響の強さが窺える。書名は一般に「かしょうき」と読みならわすが、巻五第九十段（七十七丁表）末に「是ぞ可笑記（おかしき）のをはり成ける」とあることから「おかしき」と読むのが正しいとの説もある。本書は、のちに「可笑記評判」はじめ多くの追随作を生むことになった。

2. むさしあぶみ　　文学部蔵

仮名草子。大本（２６.７×１８.２㎝）二巻二冊。浅井了意作。萬治四年三月刊。京中村又兵衛

開板。初板は河野道清開板だが、その文字を削り中村又兵衛と入木して再摺したらしい。

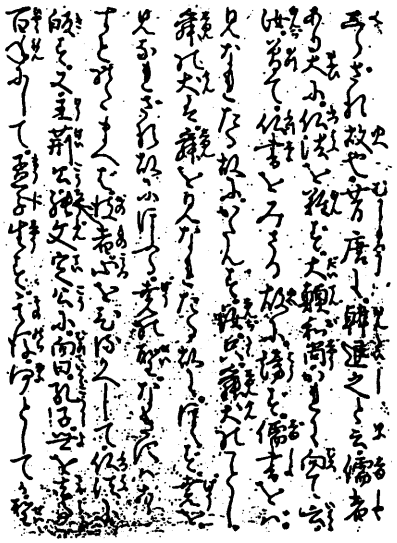
本書は明暦三年正月十八、十九日の江戸大火の状況を述べた見聞記。端書に拠れば筆者楽斎房が京都北野神社で「あづまの方へ行かよふこま物うり」に大火の模様を語るという趣向である。その楽斎房が浅井了意であることは寛文十年刊「新板増補書籍目録」に本書を「松雲作」としていることからほぼ認められる（松雲は了意の別号）。未だ小説的構成を持たぬ作品とはいえ、挿画と相俟って大火の様相、人々の動きを生き生きと伝えている。

3. 御伽婢子　　文学部蔵

仮名草子。半紙本（22.1×16.0cm）十三巻六冊。瓢水子松雲処士（浅井了意）作。初版は寛文六年、京、秋田屋平左衛門刊。本書はその再版本。元禄十二年刊、京、中川茂兵衛版。題簽「新板御伽婢子」（第三冊以下はかな書）。「伽婢子序」と題する自序に次いで雲樵の漢文序あり。

本書は同じ作者の手になる「狗張子」と並んで怪談物の先駆として有名である。その序に「学智ある人の目をよろこばしめ、耳をすゝぐためにせず、たゞ児女の聞をおどろかしをのづから心をあらため正道におもむくひとつの補とせん」と執筆意図を述べる。内容は中国の小説「剪燈新話」「剪燈余話」などを中心に日本の話に翻案したもので全六十七話からなる。のちに浮世草子「新御伽婢子」「御前御伽」等の追随作を生み、また読本にも影響を与えるなど、その文学史的意義は大きい。

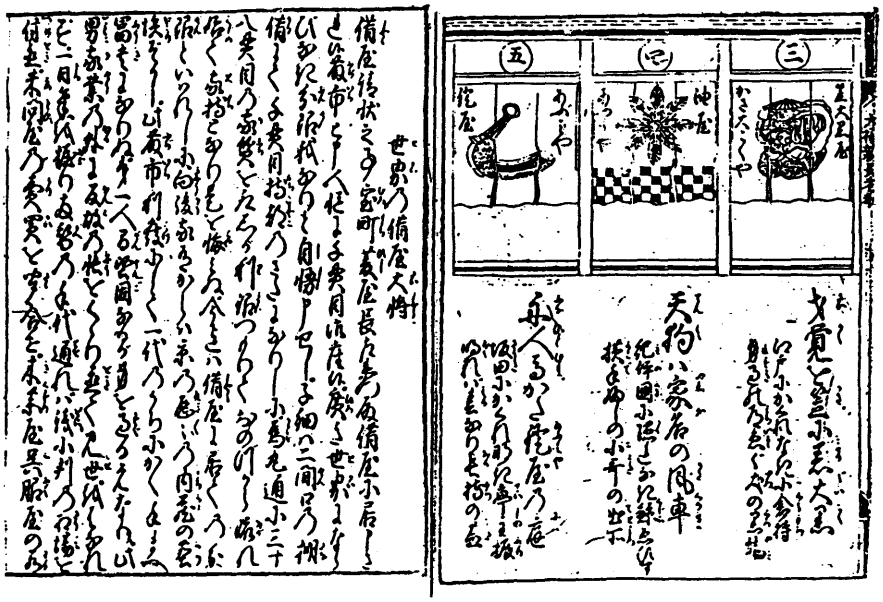
4. 海上物語　　文学部蔵



仮名草子。大本（27.0×19.3㎝）二巻二冊。恵中作。「寛文六丙午年弥生上旬／山本平左衛門板行」の刊記あり。題簽「新板海上物語」。恵中は、肥前蓮池の人。鈴木正三の弟子で「驢鞍橋」等の著作があり、元禄五年刊「広益書籍目録」の作者附によって本書の作者であると考えられている。

作品の舞台となるのは長崎から薩摩に向う乗合船。一人の老僧が乗合客の質疑に応え、それに対する反論をも論破するという形で、仏教教義問答が繰り広げられる。筆者の意図は明らかに啓蒙教訓にあり、話の結末に「船中の人々、ひしと此機をうけ。一切に勝得て。物の上となり。いさみにいさんて。念仏」することになるという筋立ては、虚構を巧みに生かした説法書の趣がある。「広益書籍目録」は本書を法語の部に分類する。

5. 日本永代蔵　　文学部蔵



浮世草子。大本（25.2×17.7㎝）六巻六冊。井原西鶴作。貞享五年正月刊。京、金屋長兵衛、大坂、森田庄太郎板。本書は後印本の一つで、奥付の「金屋長兵衛」の左にあった「江戸、西村梅風軒」の文字が削られている。

「好色一代男」出版以来、当代小説界の第一人者となっていた西鶴が初めて世に問うた町人物として名高い。副題の「大副新長者教」は江戸初期に刊行された「長者教」を意識した命名であることは明らかで、ここに新時代に適しい長者になるための指針の書にせんとする作者の意図が籠められている。巻末に「金銀有所にはある物かたり聞伝へて」とある如く、実際に見聞した話を基にしたモデル小説であり、西鶴は彼等の成功談、失敗談を綴ることによって、金銭と人間の織りなす悲喜劇を描きあげた。「永代蔵」には本書の如き後印本や異版が多数存在し、当時の好評ぶりを裏付けている。

6. 世間胸算用　　文学部蔵

浮世草子。大本（26.4×17.4㎝）五巻五冊。井原西鶴作。西鶴自筆の板下を用いたと思われる序文末に「難波西鶴」の署名と「松壽」の印記がある。元題簽は欠。内題、「胸算用（むねさんよう）大晦日ハ一日千金　巻一（～五）」。元禄五年、京、上村平左衛門、江戸、萬屋清兵衛、大坂、伊丹屋太郎左衛門刊。

本書は元禄六年に没した西鶴の存命中刊行された最後の作品で、晩年の町人物の中でも秀作の誉れ高い。副題の「大晦日ハ一日千金」が示す通り、一年の総決算日である大晦日の二十四時間という限定された時間の中で、あらゆる町人層の生きざまを様々な形で浮き彫りにした二十篇の作品から成る。とりわけこの日を必死に切り抜けようとする中下層商人が描かれる諸篇には、人間のあわれさ、おかしさが秀逸な筆捌きで表現しつくされており、我々に鮮烈な印象を与えるのである。

7. 西鶴織留　　文学部蔵

浮世草子。大本（25.5×17.8㎝）六巻六冊。井原西鶴作。北条団水編。西鶴没後の元禄七年三月刊。江戸万屋清兵衛、大坂雁金屋庄兵衛、京上村平左衛門板。本書の題簽は一部剥落するが、「繪入西鶴織留」に傍書して巻一、二には「本朝町人かゝみ」、巻三～六に「世の人心」との副題がある。「難波西鶴」の署名と「松壽」の印記のある自序と、編者団水の序文が備わる。内題は「西鶴織留本朝町人鑑」（巻一、二）、「西鶴織留世の人心」（巻三～六）。柱記は全巻を通して「世の人心」である。団水序によれば、本書は「本朝町人鑑」「世の人心」という西鶴の二つの未完草稿を編んで一書としたものである。西鶴の序文に「是を世の人心と名づけ」とあるのは後半四巻の序として書かれたものであろう。「世の人心」とはまさに作家西鶴の生涯のテーマとも言うべきもの。本書においても西鶴は多彩な素材を駆使してそれを描き出しているが、未定稿なるゆえか、全体に随筆風な筆致に流れている。

8. 風流詆平家　　文学部蔵

浮世草子。横本（13.0×19.7cm）四冊存（巻一、三～五、巻二欠）。正徳五年正月刊。京、八文字屋八左衛門板。江島其磧を作者として招いた八文字屋は先ず役者評判記で当りをとり、次いで浮世草子に進出、忽ち西鶴以後の小説出版界をリードする版元となった。しかし利益配分等をめぐって実作者其磧と作者を名乗る版元自笑が次第に対立、やがて其磧は江島屋として分立、両者確執の時代を迎えるに至った。本書はその対立時代の出版。序末に「作者八文字屋自笑」と記すが、やはり代作者（未練、風瓢子などに擬する説あり）が存在していたことは疑えない。この時期八文字屋は長編やつし物を手がけており、後編「義経風流鑑」とともに、本書は義経・弁慶を中心とする源平物語を俗にくだいてみせたものである。豊かな古典の教養に裏打ちされた巧みな文章は、作者の手腕の確かさを示している。

9. 古今奇談英草紙　　文学部蔵

読本。半紙本（22.2×15.7cm）五巻五冊。近路行者（都賀庭鐘）作。初刷は寛延二年。本書は三刷本の奥付「江戸西村源六／大坂柏原屋清右衛門／大坂河内屋八兵衛」のあとに、更に江戸須原屋茂兵衛他三肆、京坂各一肆の「三都発行書肆」と書かれた奥付を有する。見返しに「古今奇談前編／英草紙／浪花書林称光堂崇高堂」。序末に「十千閣の主人十千閣上に筆を操る」。十千閣主人は校正者千里浪子と同じく庭鐘の分身。本書は「繁野話（しげしげやわ）」「莠句冊（ひつじぐさ）」と続く三部作の第一作で前期読本の出発点となった作品。全九篇から成り、内容は中国白話小説の「警世通言」「古今小説」を本邦の戦国時代に舞台を移して翻案したもの。自らの歴史観を加味しつつ、雅俗折衷、和漢混淆の文体を駆使した知的要素の濃い読み物は、新しい小説の誕生と呼ぶに適しいものであった。秋成の「雨月物語」もこの作品に刺激されて生まれたと言われている。

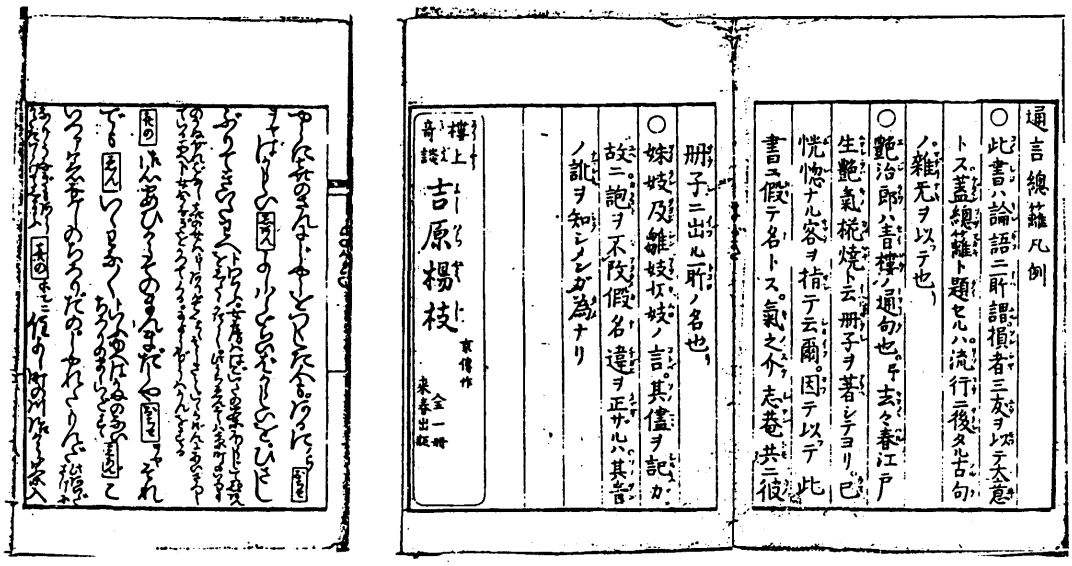
10. 里見八犬伝　　本館蔵

読本。半紙本（22.9×15.8cm）九輯五十三巻百六冊。曲亭馬琴作。柳川重信、溪斎英泉、二世柳川重信、二世柳川重政、歌川貞房画。文化十一年肇輯刊行以来、二十八年間に亘って刊行され、天保十三年全編が完結した日本古典文学史上最大の長編小説。肇輯から五輯迄が山青堂（江戸山崎平八）、六、七輯が湧泉堂（同美濃屋甚三郎）、八輯以降は文溪堂（同丁字屋平兵衛）と、版元が相次いで代わった。本館所蔵本は肇輯以下刊記に丁字屋（他五肆）の名が見え、文溪堂による再版本であることが知れる。

本書は、足利末の戦国の世を背景に、関東を中心に展開される伝奇小説。下総里見家に仕える、「犬」字を姓に持ついわゆる八犬士の活躍を、「水滸伝」に構想を借り、軍記、史料、地誌等の厖

大な資料に拠って描きあげたものである。馬琴が家族の相次ぐ死亡、自らの病苦と失明などの逆境を克服して、この大作を完成させるに至った経緯は、編末の「回外剰筆」によって窺うことができる。

11. 通言総籬　　文学部蔵


通言總籬凡例
○此書ハ論語ニ所謂損者三友ヲ以テ大意トス蓋總籬ト題セルハ流行ニ後タル古句ノ雜糅ヲ以テ也、
○艶治郎ハ書樽ノ通句也。早ク春江戸生艶氣樺焼ト云冊子ヲ著シテヨリ已恍惚ナル容ヲ指テ云爾。因テ以テ此書ニ假テ名トス。氣之介志巻共ニ彼冊子ニ出ル所ノ名也、
○娘妓及雛妓ハ妓ノ言其儘ヲ記カ故ニ詭ヲ不改假名違ヲ正サルハ其昔ノ訛ヲ知シメンガ為ナリ
樽上　京傳作　全一冊　来春出板
音語　吉原楊枝

洒落本。小本（15.9×11.1cm）一冊。山東京伝作。山東けいこう画。天明七年、江戸蔦屋重三郎版。原題簽欠、「通言総籬」と打付書。文きやう序、京伝自叙に続き、本書の趣旨を述べた凡例がある。尾題「総籬大尾」。巻末に広告半丁を付す。

洒落本は漢文戯作に始まり、明和年間刊行の「遊子方言」によって、写実と滑稽を基とする短編遊里小説という定型を確立した。本書もこの定型に従った作品で、凡例にもある通り自作の黄表紙「江戸生艶気樺焼」（天明五年）の好評を利用してその人物を借り、彼等の会話を通して、吉原の生態を隈なく描写した京伝の代表作である。全篇細密に徹した写実手法により遊里の諸相をうがち、人物描写に巧みで、当代の戯作評判記からも高い評価を与えられた。叙を書いた「文きやう」は松前百助頼定、京伝の作品に度々登場する人。画者「山東けいこう」は狂歌師海辺汐風のことと言う。

12. 田舎芝居　　文学部蔵

洒落本。小本（16.1×11.3cm）一冊。万象亭作。天明七年、江戸、鶴屋喜右衛門刊。本書は初板本。後に蔦屋重三郎求板のもの、半紙本四冊として改刻されたものがある。冒頭ほめ言葉

に「竹杖為軽／森羅亭万倍」の名、序末に「風来山人門生無名子」、校語末に「門人千差万別／天笠老人」、後序末に「七珍万宝」。跋末に「狐面堂柳郷」とそれぞれ見える。このうち竹杖為軽、風来山人門生無名子、天笠老人はともに万象亭自身のこと。他は彼の門人と見られる。

本書はその序に、当代の洒落本が瑣末的な事実の穿ちに陥った弊を批判し、「只可咲（おかしき）を専とすべし」と、戯作の本道たる滑稽の復権を宣言した、洒落本史上注目に価する作品である。舞台を遊里から越後の農村に移し、当地の田舎芝居の様子を、野趣に満ちた方言を駆使して描写している。この作品はのちの滑稽本に影響を与えるなど、文学史的意義も少なくない。

13. 梅児誉美　　本館蔵

人情本。中本（18.2×12.2cm）四編十一冊存（三篇下のみ欠）。狂訓亭主人為永春水作。柳川重信、重山画。題簽、初・後編は「梅児誉（与）美」、三・四編「春色梅児誉美」。初・篇は天保三年、三・四編は天保四年、江戸西村与八、大嶋屋伝右衛門刊。初編に自序、二編に九返舎主人序、三編に金鈴舎一宝の序があり、四編上巻末には「春色辰巳園」の広告文が見える。各編とも序・口絵（色摺り）には厚手の上質紙を用いる。又三篇を除いて多色摺の美しい袋表紙が存するのは本館所蔵本のみであり、特筆に値しよう。この袋表紙によって副題が「娘蝶吉」であることが判明する。

本書は二十編六十冊に及ぶ所謂梅児誉美シリーズの濫觴となった春水の記念碑的作品。内容は主人公米次郎をめぐる女たちとの恋や人情の葛藤を繊細な筆致で情緒豊かに描き出したもの。三組の男女が絡まっての物語の進展に多くの青年子女が心をときめかせ、大人気を博した。春水自ら「この草紙は米人お長等が人情を述るを専らとすれば（中略）必しも酒落本とおなしく評し給ふなかれ」と言うように、人情本のスタイルを確立した書である。

14. 春色辰巳園　　本館蔵

人情本。中本（18.2×12.2cm）四編十二冊。狂訓亭主人為永春水作。歌川国直画。題簽「春色辰巳園」。内題「梅暦（うめごよみ）春色辰巳園（しゅんしょくたつみのその）」。初編は天保四年、後編は天保五年、三・四編は天保六年（序文による）、江戸大嶋屋伝右衛門刊。初篇に三亭春馬の序、後編に辰巳の遊人善孝の序、三編に一松舎竹里の序、四編に自序。四編下巻末に次作「栄代談語」の広告がある。体裁は前作「梅児誉美」のそれを継承。三編を除き袋表紙が存す。本書出版の目的は初編序に「書房（はんもと）の欲心其かぐはしきに現をぬかし、今一花咲せん」とある通り。内容は米八・仇吉二人の丹次郎をめぐる鞘あてに筋をおいて、深川花街の生態を隈なく描きあげたもの。春水がこの作をなすにあたって山谷堀の船宿の女将お津賀の協力を得ていたことは、三編竹里の序に「近来門人さへ用ぬ春水、

巧拙ともに筆一本、たゞし此書の脇艪といふは、清元延津賀の校合のみ」とあるによって明らかである。

15. 東海道中 滑稽五十三駅　　文学部蔵

滑稽本。中本（18.0×11.9cm）九篇十冊。十返舎一九作・画。本書は世に名高い「膝栗毛」の改題本である。初篇を享和二年に刊行以来、一九は次々に続篇を発表、二十一年間の長期に亘る人気シリーズとなった。この「五十三駅」は発端とそれに続く八篇から成る。第一冊から順に、発端、初篇、後篇上下、三篇上下、四篇上下、五篇上下、五篇追加、六篇上下、七篇上下、八篇上中下の十冊本である。板元は江戸袋屋亀次郎以下五肆（初板は江戸村田屋治郎兵衛刊）。後篇、四篇、五篇追加に芍薬亭喜三二（菅原長根）、五・七篇に亀山人蘭衣が序を寄せ、他の各篇には一九の自序がある。内容はお馴染弥次郎兵衛、北八の迷コンビが東海道を旅して伊勢に参宮し、京を経て大坂に至る、おかしみに満ちた道中記。名所図絵などを参考に、地方の風俗が生き生きと描かれ、狂言や小咄を利用した洒落地口が全篇を覆う。表紙の図案は一九の花押に主人公二人を配したものである。